

序

鳥取市は、周辺 8 町村との合併を行い、面積765.66km²、人口20万人あまりを擁する山陰地方最大の都市となりました。

鳥取市域には、因幡国庁が置かれ、政治・経済・文化の中心となっていた国府町内をはじめとして各地に数多くの原始・古代遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は先人たちの生活を語る歴史資料として、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回行いました谷 2 号墳の調査は、国府町谷地区の急傾斜地崩壊対策事業に係る発掘調査として、平成19年10月から行ってきました。調査の結果、土師器、須恵器の土器類や、鉄鏃などの遺物が出土し、石室を埋葬施設とする古墳時代後期末頃に築造された古墳であることが明らかとなり、ここに発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆さまをはじめ多くの方々の地域の歴史を考える一助になれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様、ご指導・ご助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 20 年 2 月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 山崎 祥次

例 言

1. 本報告書は、国府町谷地区急傾斜地崩壊対策事業に係る事前調査として実施した谷2号墳の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、平成19年度に鳥取県の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査遺跡の所在地は、鳥取市国府町谷196-1である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 本書における方位は、真北の第1・2図を除き他は磁北を示す。また、レベルは海拔標高である。
6. 現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、濱橋博子を中心として行った。
7. 本書の執筆、編集は前田均が担当し、神谷伊鈴、濱橋博子が補佐した。
8. 現地調査および報告書作成にあたって多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。

本文目次

序
例言

第1章

発掘調査の経緯

1. 発掘調査にいたる経緯と経過…………… 1
2. 調査の組織・体制…………… 1

第2章 遺跡の位置と歴史的環境…………… 2

第3章 調査の結果

1. 谷2号墳の調査…………… 4
2. 墳丘外出土遺物…………… 10
3. まとめ…………… 11

写真図版
報告書抄録

挿図目次

- 第1図 周辺遺跡分布図…………… 3
- 第2図 調査地位置図…………… 4
- 第3図 調査前地形図…………… 5・6
- 第4図 墳丘断面図…………… 5・6
- 第5図 墳丘遺存図…………… 7
- 第6図 石室実測図…………… 8
- 第7図 周溝内遺物実測図…………… 9
- 第8図 出土遺物実測図…………… 10
- 第9図 墳丘外出土遺物実測図…………… 11

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版 1 | 調査地遠景（北西から）
調査前全景（北東から）
調査前全景（南西から） | 図版 5 | 石室腰石検出状況（北東から）
石室除去後（北東から）
石室除去後（南東から） |
| 図版 2 | 表土除去後（南西から）
東西ベルト墳丘断面（北東から）
周溝埋土状況（北東から） | 図版 6 | 調査後全景（北東から）
周溝遺物出土状況（北東から）
周溝遺物出土状況 |
| 図版 3 | 石室背面埋土状況（北から）
墳丘検出状況（北東から）
石室遺存状況（南東から） | 図版 7 | 石室遺物出土状況（北東から）
墳丘外遺物出土状況
出土遺物 |
| 図版 4 | 石室遺存状況（北東から）
石室遺存状況（東から）
石室遺存状況（南西から） | | 墳丘外出土遺物 |

第1章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査にいたる経緯と経過

谷2号墳は鳥取市国府町谷地内に所在し、谷集落の北東側に張り出した丘陵の裾部に位置している。この丘陵裾部の縁辺には谷集落がせまっており、崩落の可能性がある危険場所として以前から崩壊を防ぐ対策事業が進められてきている。今回の発掘調査はこれらの事業地内に所在する谷2号墳について実施したものである。

事業計画が具体的に示されたのは平成17年度である。事業計画の事前協議を受けた鳥取市教育委員会では事業計画地内の現地踏査を行った。その結果、崩落が進んでいるものの、石材の残存状況や土器が遺存していることから古墳が所在することが明らかとなり、発掘調査による記録保存で対応することとなった。調査は、鳥取県から委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが実施した。

現地調査は、立木の伐採、搬出作業の終了をまって9月26日から開始した。まず、測量杭の設定から着手し、調査対象地の地形測量、調査前写真撮影、その後表土除去作業、墳丘検出作業をすすめていった。墳丘検出作業の結果、丘陵の上位側を区画する周溝が検出され直径8m前後の古墳であることが明らかになった。墳丘検出作業を終え、土層観察ベルトの断面記録、ベルト除去、墳丘遺存状況の写真撮影の後、10月4日から埋葬施設の検出に取りかかった。検出の結果、流失が著しいものの石材を積み上げた壁体を確認され、石室を内包する古墳であることが判明した。副葬品は極わずかではあったが、石室床面から鉄鏝が出土した。石室の平面、断面実測、写真撮影等の諸記録を取ったのち、石材の取り外し、石室基底部の調査および断ち割りによる墳丘調査を行い、10月18日に現地調査を終了した。調査面積は63m²である。

調査記録の整理および出土遺物の水洗、注記、復元等の作業は現地調査終了後に実施した。本格的な報告書の作成業務は平成19年12月～平成20年1月に行い、1月末に一連の調査を終了した。

2. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

調査主体	財団法人	鳥取市文化財団
	理事長	山崎 祥次
	副理事長	住田 高市
		三田 三香子
調査指導	鳥取市教育委員会	事務局文化財課
事務局	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
	所長	前田 均
	所長補佐	山田 真宏
	主幹	谷口 恭子
	調査事務	秋田 澄世
調査担当	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
	調査員	前田 均
		谷口 恭子
	調査補助員	神谷 伊鈴
		濱橋 博子

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

谷2号墳は、鳥取市南東部の国府町谷地内に所在している。国府町は、その中央部を扇ノ山山系に源を発する袋川が東西に流れ、大小の支流を合わせながら千代川に合流する。流域に形成された平野は豊富な水源をもとに水田を潤し、人々の生活基盤をなしていたものとみられ、平野を望む低丘陵上に築かれた数多くの古墳からその繁栄を知ることができる。

国府町における人々の最初の足跡は、因幡国庁跡と栃本廃寺跡から出土した縄文土器片と清水地内で収集された石棒の破片にとどまり、最古の遺跡は弥生時代中期とされる安田遺跡である。安田遺跡は旧河川の自然堤防上に立地し、竪穴住居跡、貯蔵穴とともに弥生中期の壺、甕などの土器が出土している。また、弥生時代後期の遺物散布地として国分寺、法花寺地域、弥生時代末～古墳時代初頭の築造とされる糸谷1号墳（四隅突出型墳丘墓）が知られているが、同時期の遺跡数は少なく、その数が増すのは古墳時代に入ってからである。

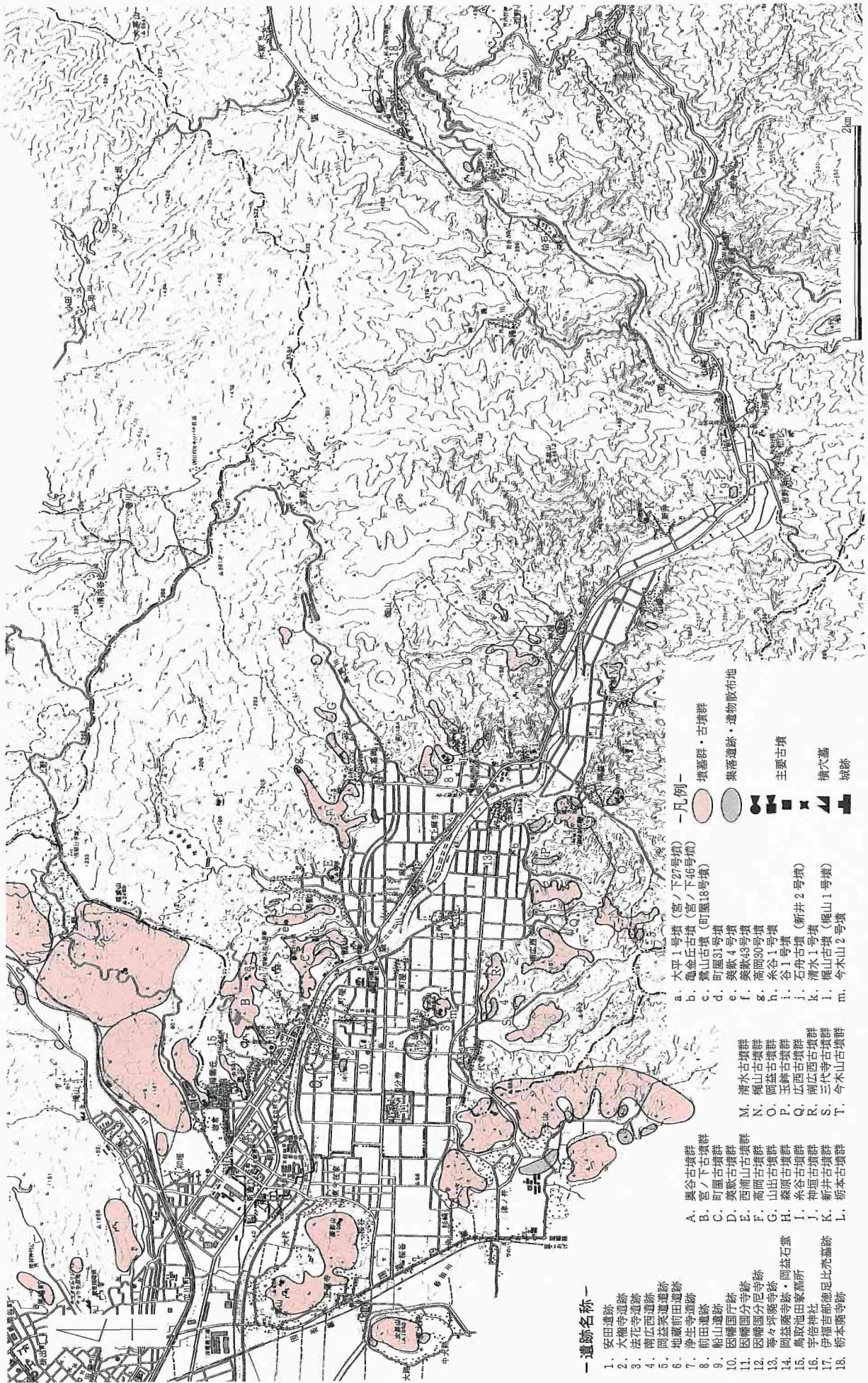
古墳時代には袋川兩岸の丘陵上に多くの古墳が造られている。奥谷古墳群、宮ノ下古墳群、町屋古墳群、美歎古墳群、高岡古墳群、西浦山古墳群、山出古墳群、森原古墳群、糸谷古墳群が右岸に展開し、左岸には今木山古墳群、三代寺古墳群、南広西古墳群、広西古墳群、岡益古墳群、清水古墳群、梶山古墳群・梶山横穴群等が位置している。また、中・上流域の丘陵にも神垣古墳群、新井古墳群、栃本古墳群等の古墳群がみられ、袋川流域の奥部にまで古墳が築かれていることが確認されている。これらの古墳群の中には、群の中心的位置づけとなる前方後円墳が多くみられ、大平1号墳(宮ノ下27号墳 全長39.4m)、美歎4号墳（全長38m）、美歎43号墳（全長22.5m）、町屋31号墳（全長23m）、高岡30号墳（全長58.5m）、今木山2号墳（全長30m）、清水1号墳（全長30m）や、前方後方墳である谷1号墳（全長29.5m）が知られている。古墳の総数は460基以上を数え、前方後円墳の多さとともに古墳の密集する特徴ある地域となっている。

古墳の時期は調査例も少なく不明な点が多いが、弥生時代末～古墳時代初頭の築造とされる糸谷1号墳が最古で、糸谷3号墳、竪穴式石室をもつ亀金丘古墳（宮下46号墳）、詳細不明ながら筒形銅器が出土したとされる西浦山古墳群が前期古墳として挙げられる。中期古墳の存在は不明瞭で、大半は後期～終末古墳のようである。後期～終末古墳の中には横穴式石室を主体とする古墳も多く、中でも、多角形の墳形を持ち、凝灰岩切石積の横穴式石室の玄室に魚、三角文、円文などの彩色壁画が施された梶山古墳や、魚、船、鳥などの線刻壁画が見られる鷲山古墳（町屋18号墳）、横穴式石室内に家型石棺を納める石舟古墳（新井2号墳）等があり特色のある古墳が築かれている地域として注目される。

古墳時代以降の遺跡として栃本廃寺跡、岡益廃寺跡、等ヶ坪廃寺跡、大権寺廃寺跡等、白鳳期の創建とされる寺院跡が確認されている。また、岡益石堂、伊福吉部徳足比売墓跡などの類例を見ない特異な遺跡が所在している。特に、伊福吉部徳足比売墓跡は、出土した青銅製骨蔵器の刻銘から律令制下における火葬による葬制の内容を語る国の貴重な遺跡となっている。国府町はその名が示すとおり因幡の国衙が置かれた地であり、当時の政治・経済・文化の中心として重要な地位をしめていた地域である。因幡国庁の調査は昭和47年から行われ、国庁の中心施設や、奈良時代の国分寺跡が確認されている。

参考文献

- 国府町『国府町誌』1987年
- 近藤義郎『前方後円墳集成 中国・四国編』1991年
- 鳥取県埋蔵文化財センター『岡益廃寺』2000年
- 鳥取県教育委員会『因幡国庁遺跡発掘調査報告書VI』1978年



第1区 周边遗址分布图 (S=1:50,000)

— 遗址名称 —

1. 安田遗址
2. 大佛寺遗址
3. 法花寺遗址
4. 南山西遗址
5. 阿益宗遗址
6. 地藏前田遗址
7. 浄生寺遗址
8. 朝田遗址
9. 船山遗址
10. 因幡国分寺遗址
11. 因幡国分尼寺遗址
12. 香々坪庵寺遗址
13. 阿益宗寺遗址
14. 阿益宗寺遗址
15. 鳥取他田家遗址
16. 宇倍神社
17. 伊福寺遗址
18. 初本庵遗址

- A. 泉古墳群
- B. 宮ノ下古墳群
- C. 町屋古墳群
- D. 美敷古墳群
- E. 西浦山古墳群
- F. 高岡古墳群
- G. 山出古墳群
- H. 森原古墳群
- I. J. K. 糸合古墳群
- L. 初本古墳群

- M. 清水古墳群
- N. 龜山古墳群
- O. 阿益古墳群
- P. 玉跡古墳群
- Q. 南山西古墳群
- R. 三代寺古墳群
- T. 今木山古墳群

- 大平1号墳 (宮ノ下27号墳)
 a. 龜山古墳 (宮ノ下46号墳)
 b. 町屋古墳 (町屋18号墳)
 c. 町屋31号墳
 d. 美敷4号墳
 e. 高岡30号墳
 f. 糸谷1号墳
 g. 糸谷1号墳
 h. 石舟古墳 (新井2号墳)
 i. 清水1号墳
 j. 清水1号墳 (龜山1号墳)
 k. 三代寺古墳
 l. 今木山2号墳
 m. 今木山2号墳

- 凡例 —
- 墳墓群・古墳群
 - 集落遺跡・遺物散布地
 - 主要古墳
 - ▲ 横穴墓
 - ▲ 城跡

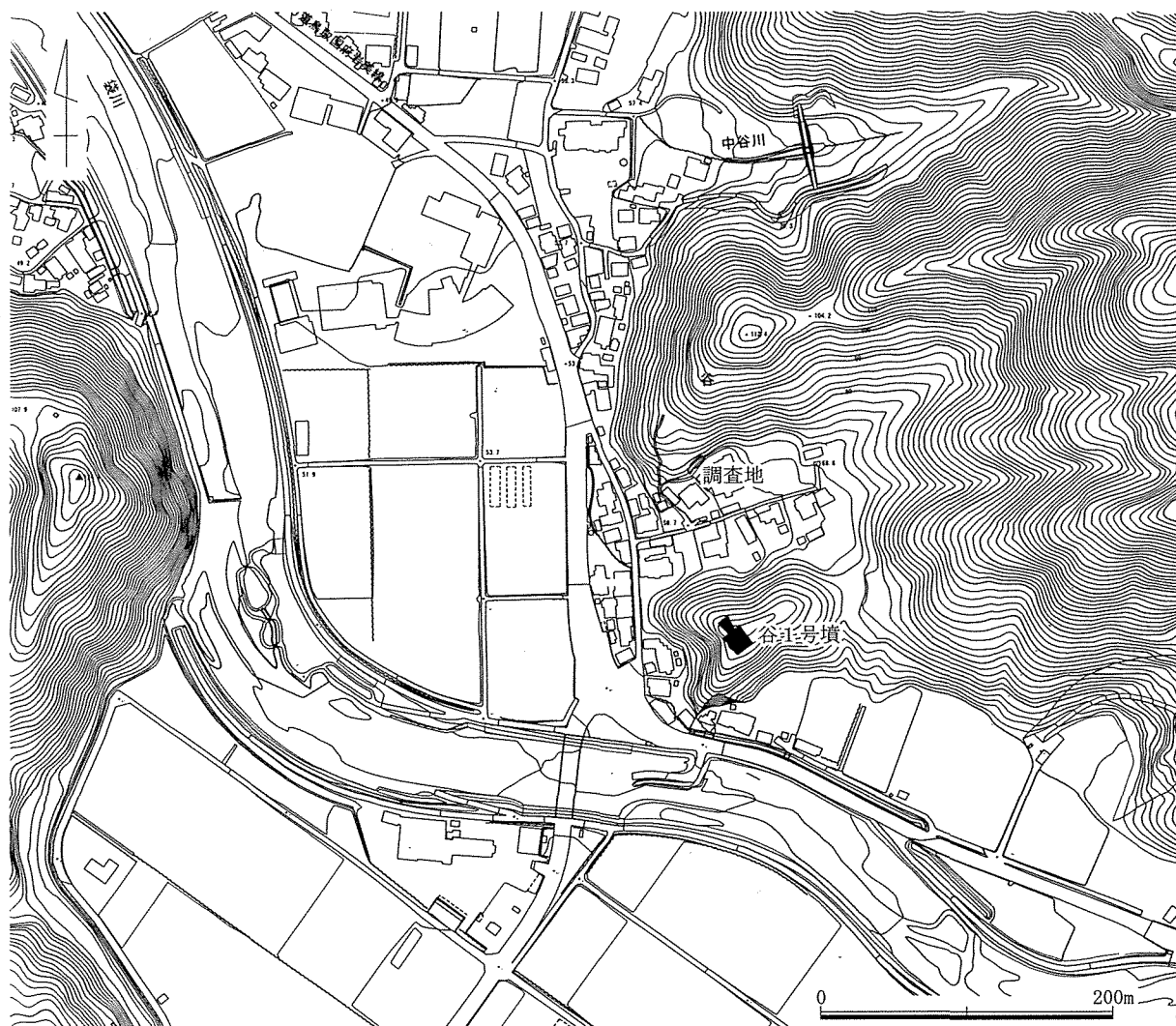
第3章 調査の結果

1. 谷2号墳の調査

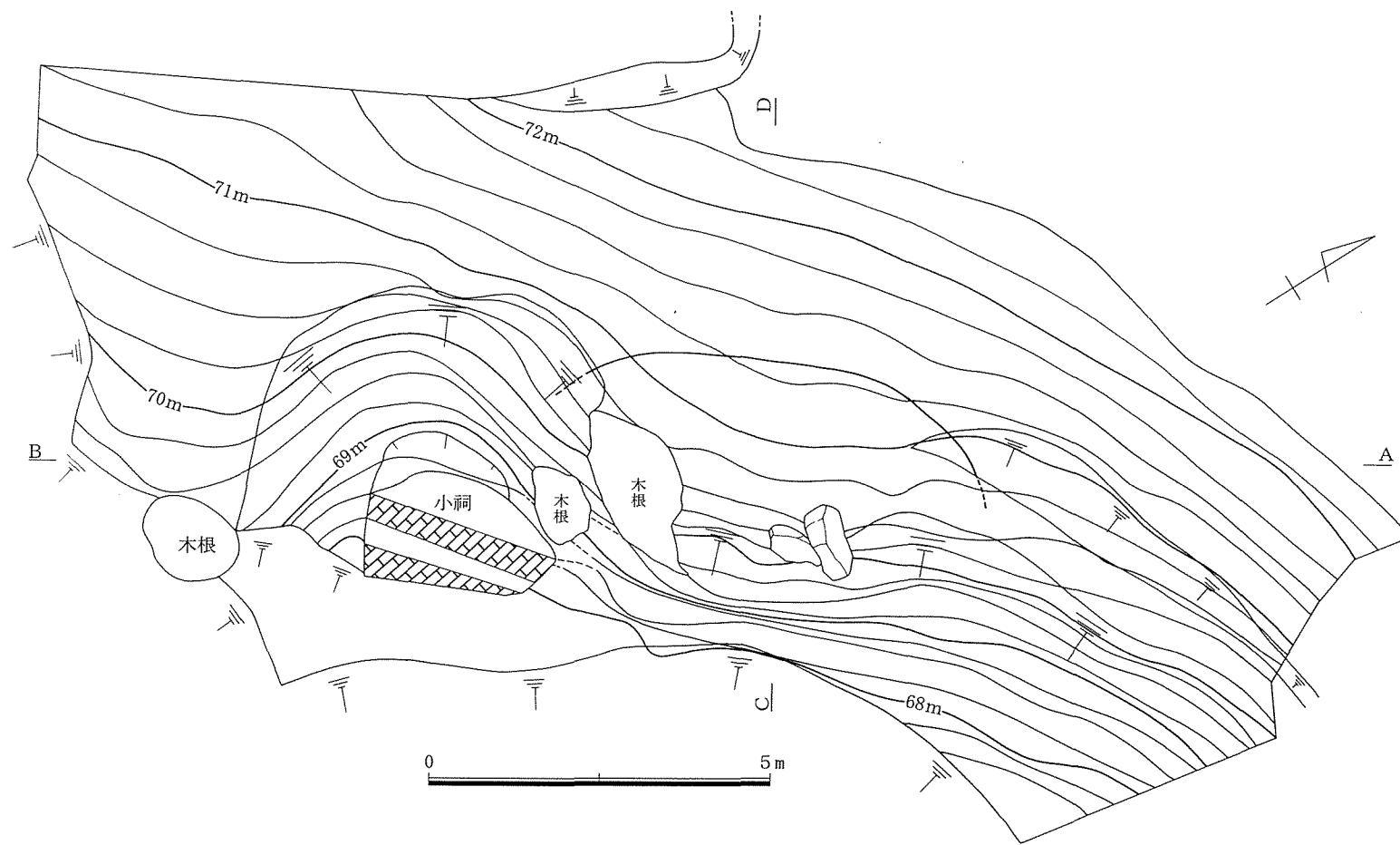
谷地内には現在のところ全長29.5mの前方後方墳として知られている谷1号墳と、今回の調査対象となった谷2号墳が確認されるにとどまっているが、周辺丘陵上には多くの古墳が築かれていることが明らかになっている。袋川を挟んだ対岸の低丘陵上には、58基あまりで構成される岡益古墳群や、梶山古墳群が展開し、多角形の墳丘をもち、切石を用いた横穴式石室の玄室に彩色壁画が施された特異な古墳として注目されている梶山古墳（梶山1号墳）が位置している。また、袋川中流域の右岸丘陵にも、玄室に家形石棺を納めた石舟古墳（新井2号墳）をはじめとして、横穴式石室を主体とする神垣古墳群、新井古墳群などが知られており、古墳時代後期後半から終末期の古墳が多数築かれている地域となっている。

〔位置と現状〕

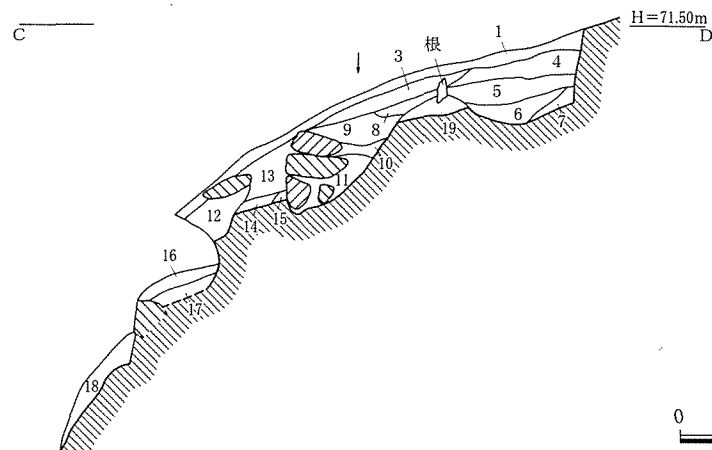
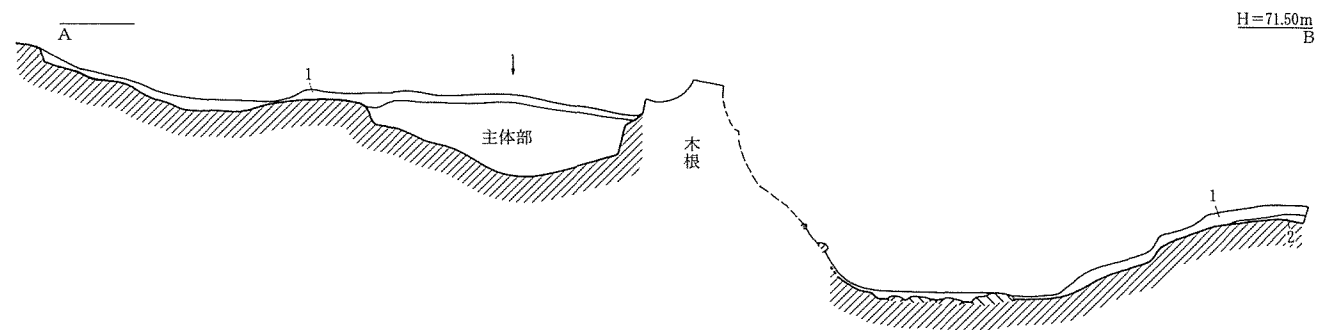
2号墳は谷集落の北東側背面に位置し、標高112mあまりを頂部とする丘陵の南斜面を下った標高69～71.5mの裾部に立地している。丘陵の西側には袋川が蛇行しながら流れ、兩岸に形成された平野部は水田として利用され、眼下にこの平野部を望むことができる。水田面からの比高差は18mあまりを測る。調査地の現状は、崩落や大木の根による攪乱等により旧地形が大きく失われ、旧地形を比較的保っているとみられる斜面上位側の観察でも、墳丘の高まりや周溝の痕跡も認められず、墳丘の流失が明らかであった。



第2図 調査地位置図 (S=1:5,000)



第3図 調査前地形図 (S=1:100)



1. 表土
2. 暗褐色シルト 10YR3/3
3. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4~5/6
4. 明黄褐色シルト 10YR6/6
5. にぶい黄褐色シルト 10YR5/6 (やや粘質)
6. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3~3/3
7. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒灰色をおびる)
8. 褐色粘質土 10YR4/4 (暗褐色土を含)
9. 黒褐色粘質土 10YR3/2 (にぶい黄褐色土を含)
10. 黒褐色粘質土 10YR3/1 (9より暗)
11. 黒褐色粘質土 10YR3/1 (10より暗 褐色土をわずかに含)
12. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
13. 暗褐色シルト 10YR3/3~3/2 (やや粘質)
14. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (13より暗)
15. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 (13、14より明)
16. 暗褐色シルト 10YR3/4
17. 暗褐色シルト 10YR3/3 (16より暗 褐色土を含)
18. 暗褐色シルト 10YR3/4~4/4
19. 黒褐色粘質土 10YR3/2 (旧表土)

第4図 墳丘断面図 (S=1:80)

〔墳 丘〕

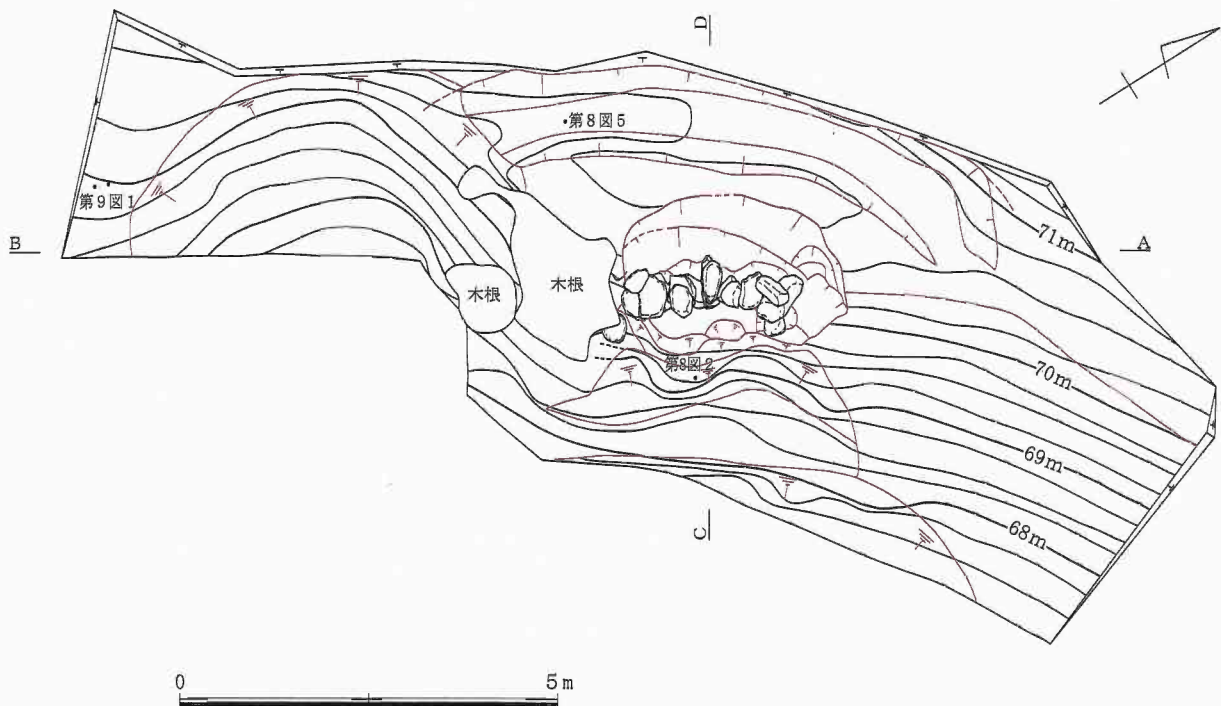
墳丘の大半が大きく流失しているが、斜面上位側で周溝と盛土とみられるわずかな堆積層を検出した。周溝は、幅0.9～1.2mあまり、深さは最深部で50cm前後を測り、地山を掘削して弧状に巡らしている。立地地形から見て斜面上位側を区画する程度で納めていたものと思われる。盛土は周溝部から埋葬施設（主体部）掘り方との間で確認された。墳丘断面図の第19層（黒褐色粘質土）が旧表土とみられ、上層の第8層（褐色粘質土）が盛土の一部と考えられる。埋葬施設の残存状況から推測して、大量の盛土によって墳丘が築造されていたものと考えられるが、そのほとんどが流失しており詳細は不明である。墳丘形態は、埋葬施設の位置や周溝の掘削状況からみて、直径8m前後の円墳になるものと推測される。

〔埋葬施設〕

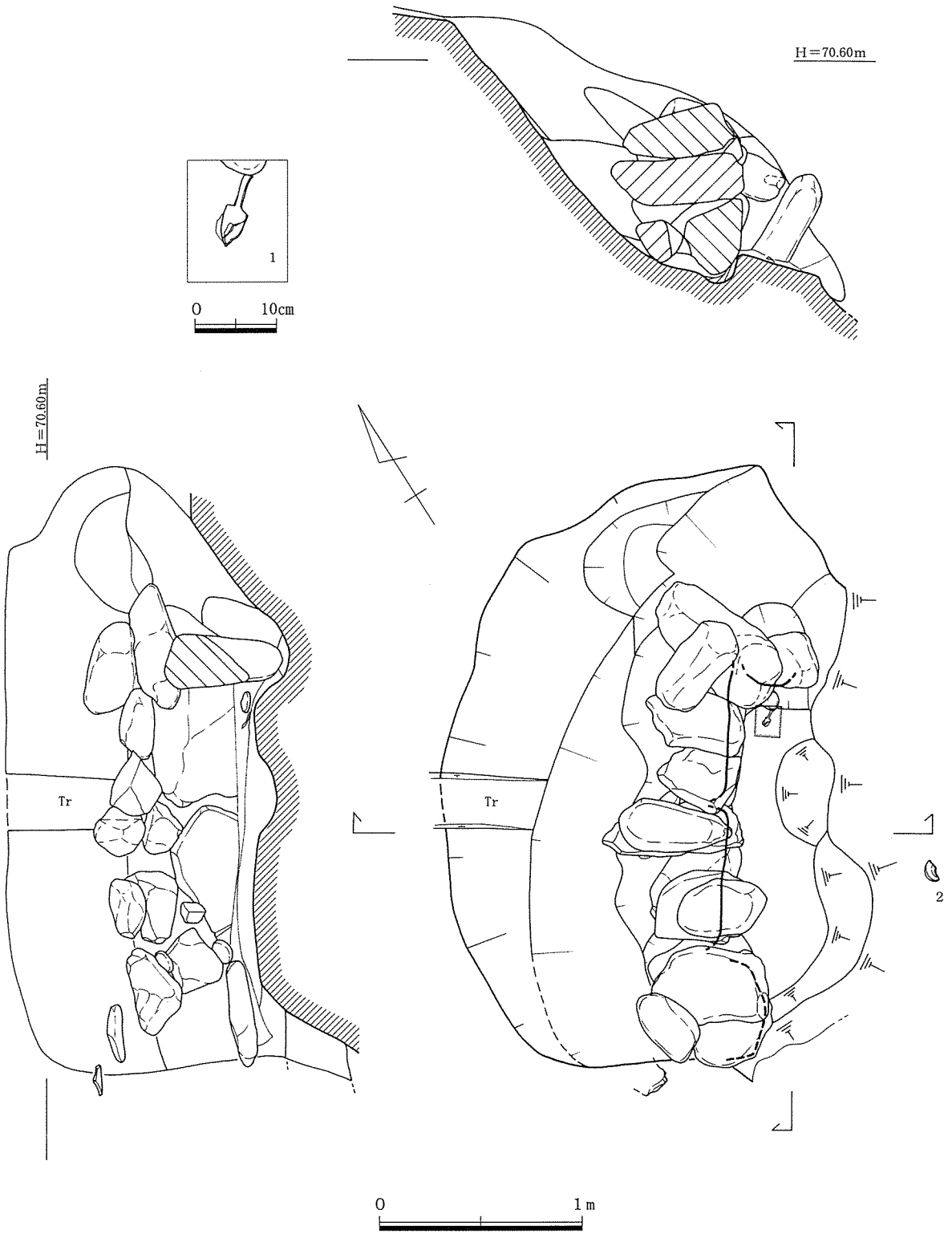
厚さ10cm前後の表土を除去した段階で規則的に並ぶ石積が検出され、その状況や掘り方等から埋葬施設として石室が築かれていたものと考えられる。石室は、天井部をはじめ側壁の大半が失われており、斜面上位側にあたる西側壁の下半部と、北壁隅に配置された1石が残存するのみである。西側壁は腰石と腰石上部に積まれた1～2石が遺存している。壁体は、比較的大型の石材を立てて腰石とし、その上部には小ぶりの石を小口積みにして構築している。南西隅が根の攪乱により不明瞭であるが、幅は1.8m前後と推測され、遺存高は75cmを測る。

床面は西側壁下のみ原状を保っているものとみられ、残存部から推察して石室掘り方の基底面に厚さ8cmあまりの灰黄褐色粘質土（第14層）を敷き整えているものと考えられる。

石室掘り方は、地山を大きく掘り込んでつくられており、壁際を一段深く掘り窪めて腰石を配置している。掘り方の規模は残存長2.9m、深さ1.2mを測る。



第5図 墳丘遺存図 (S=1:100)

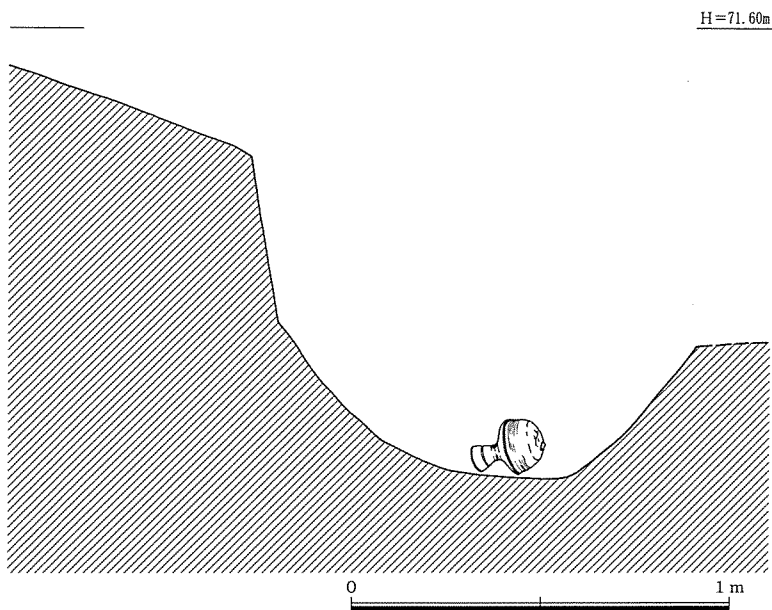
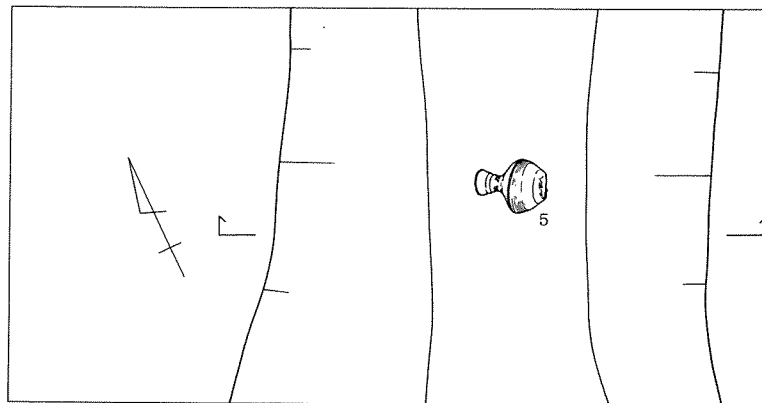


第6図 石室実測図 (S=1:30)

〔出土遺物〕

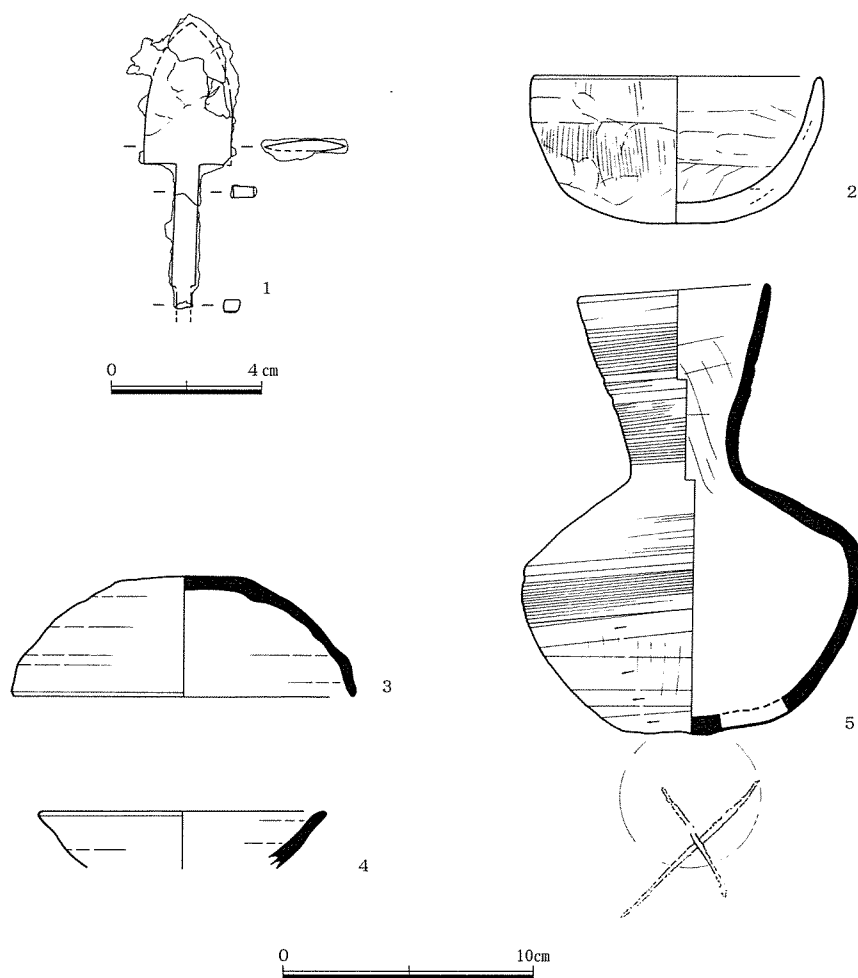
遺物は、鉄鏃（第8図1）、土師器椀(2)、須恵器蓋(3)、須恵器口縁部(4)、須恵器長頸壺(5)が出土した。(1)は石室壁真下の床面に有り概ね原位置を保っているものと思われる。(2)は石室床面から60cm下方の崩落土から検出された。出土位置から推測して石室内に副葬されていた可能性が考えられる遺物である。(3)は(5)の南よりにあり、周溝底からわずかに浮いた状態で検出された。おおむね原位置を保っているものと思われる。(4)は周溝の埋土中から出土した遺物である。(5)は完形の壺で周溝底面にはほぼ接する状態で検出された。古墳の築造に伴って納められたものと推察される。

鉄鏃(1)は基部の尖端を欠く。平面形は長三角形で、残存長7.76cm、鏃身長3.7cm、幅2.25cm、厚さ0.25cmを測る。わずかに木質痕が認められる。土師器椀(2)は手捏ね成形で器壁が厚い。体部はハケ目調整を施し、口縁部を横位に軽くナデて仕上げる。口径11.3cm、器高5.9cmを測り、胎土は2~3mmの砂粒を多く含む。1/2が残存する。須恵器蓋(3)は風化が著しく調整は不明瞭である。形態は、天井部から内湾して下り、口縁部でわずかに屈曲し端部を丸く外下方に納める。推定口径13.4cm、器高4.8cmを測り、若干



第7図 周溝内遺物実測図 (S=1:20)

大きめで深い器形である。(4)は須恵器口縁部とみられるが、脚部の可能性も残る。体部から大きく外反し、端部を丸く納める。推定口径は10.8cmである。焼成は良好で灰色を呈する。(5)は完形の須恵器長頸壺である。肩の張りはなだらかで、底部も平らに近い。頸部から胴部までカキ目調整を行い、体部下半はヘラ削りがみられ、成形時の叩き目を残す。底部には「メ」のヘラ記号を施す。全体に自然釉で覆われる。口径7.4cm、最大胴径13.6cm、器高17.59cmを測る。

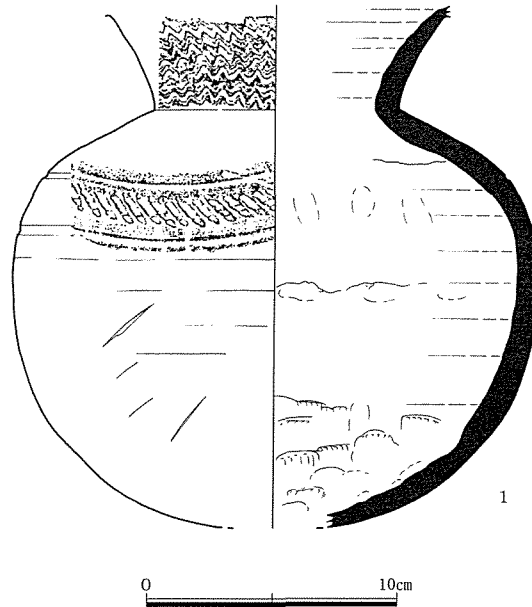


第8図 出土遺物実測図

2. 墳丘外出土遺物 (第9図 図版7)

(1)は須恵器の壺である。2号墳の南西側墳丘外に位置し、破片状態でまとまって出土した。遺構に伴う状況は見られず地山面にほぼ接している。

口頸部3/8、体部は3/8、底部1/4が残存し、口縁端部を欠く。口頸部は外傾し、体部は丸い。頸部に2段の波状文を巡らし、体部には2条の沈線の間同一工具による連続刺突文を施し、体部は丁寧なナデを行う。最大胴径20.7cmを測る。焼成は良好で灰色、褐灰色を呈する。



第9図 墳丘外出土遺物実測図

3. まとめ

今回の発掘調査は、谷集落の後背地に計画された急傾斜地崩壊対策事業に伴い、事業地内に所在する谷2号墳を対象にして実施したものである。

2号墳は、集落の北東側に張り出した丘陵の裾部に位置し、西側に袋川を望む標高80m前後に立地している。袋川を挟んだ対岸の低丘陵には国指定史跡となっている梶山古墳をはじめ、岡益廃寺跡、岡益石堂などの注目される遺跡が集まる地域となっている。また、袋川中流域の丘陵には神垣古墳群、新井古墳群、清水古墳群などの多くの古墳が知られ、それらの中には家形石棺が納められている石舟古墳(新井2号墳)、前方後円墳の清水1号墳(全長30m)、前方後方墳とされる谷1号墳(全長29.5m)等や、横穴式石室を内包する古墳も多く築かれており、古墳時代後期以降の繁栄の様子をうかがうことができる。2号墳はこのような地域の一面に築かれた古墳となっている。

2号墳は、丘陵斜面の崩落や後世の改変によって流失が著しいものの、石材の露頭や土器の出土などからその所在が明らかになった古墳である。調査の結果、斜面の上位側を巡る周溝や、墳丘築造時の盛土の一部、埋葬施設が検出された。墳丘の約2/3以上がすでに失われていることから、詳細については不明な点が多く推定の域を出ないが、遺存部から推測して直径8m前後の円墳と思われ、斜面上位を周溝で区画し、旧表土の上に多量の盛土を行って墳丘を築いていたものと推察される。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央部に位置し、地山を大きく掘削した掘り方に石を積み上げ側壁を築いている。残存部が側壁一面と隅石のみであることから不明の点が多いが、長さ3m以上を測る掘り方の規模や、掘り方の基底部分を加工した後、大型の石材を腰石に配置して段階的に石積する等の技法から石室が構えられていたものと考えられる。石室の形態は特定できないが、立地等から横穴式石室の可能性も考えられる。

遺物は、石室床面から鉄鏃、石室からの転落と見られる土師器椀、周溝から須恵器壺、蓋、口縁部が出土した。量的にはごくわずかであるが、周溝底面から出土した壺は良好な状況で遺存しており、古墳築造に伴って納められた可能性の強い遺物である。

古墳の時期は、出土した須恵器蓋(3)からみて6世紀末頃の所産と考えられ、梶山古墳(梶山1号墳)より若干先行する時期の築造になるものと思われる。

圖 版

調査地遠景
(北西から)



調査前全景
(北東から)



調査前全景
(南西から)



図版 2



表土除去後
(南西から)



東西ベルト墳丘断面
(北東から)



周溝埋土状況
(北東から)



石室背面埋土状況
(北から)



墳丘検出状況
(北東から)



石室遺存状況
(南東から)

図版 4



石室遺存状況
(北東から)



石室遺存状況
(東から)



石室遺存状況
(南西から)

石室腰石検出状況
(北東から)



石室除去後
(北東から)



石室除去後
(南東から)



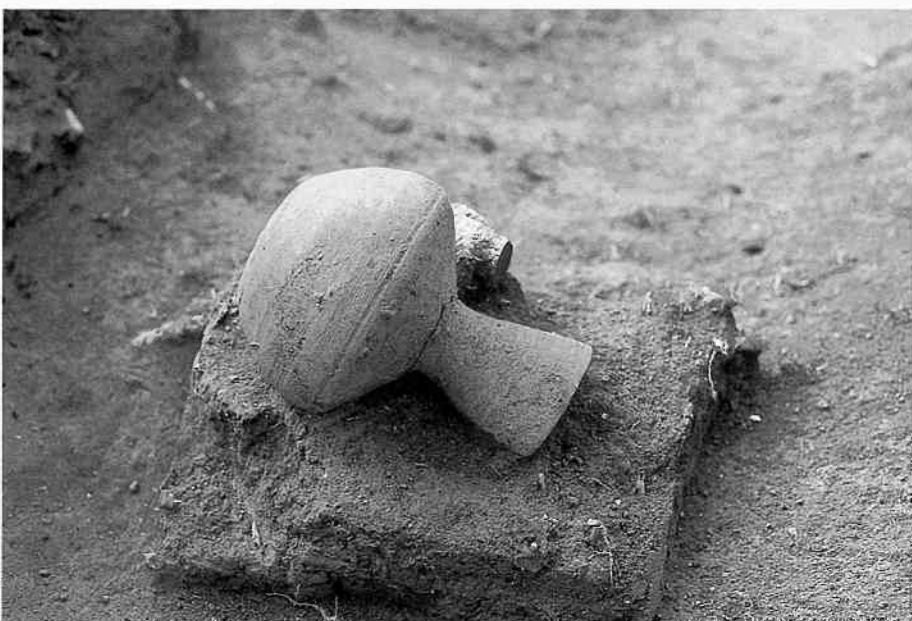
図版 6



調査後全景
(北東から)



周溝遺物出土状況
(北東から)



周溝遺物出土状況



石室遺物出土状況（北東から）



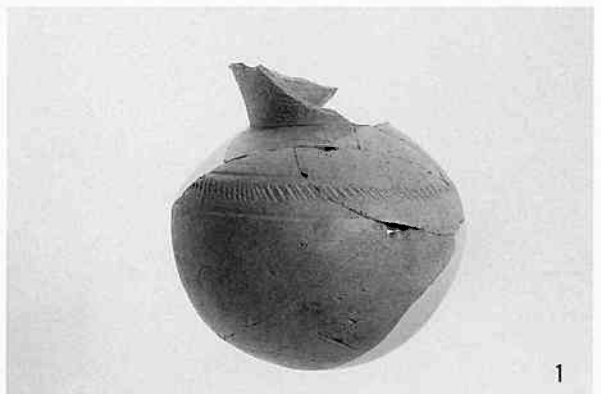
墳丘外遺物出土状況



出土遺物



出土遺物



墳丘外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たに2ごうふん							
書名	谷2号墳							
副書名	谷地区急傾斜地崩壊対策事業に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	前田 均							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0197 鳥取県鳥取市国府町町屋305-1 TEL (0857) 23-2410							
発行年月日	西暦2008年(平成20年)1月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たに 谷 古 墳 群	とっとりし 鳥取市 こくふちようたに 国府町谷	31201		35° 27' 35"	134° 17' 54"	H190926 ~ H191018	63	砂防
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
谷2号墳	古墳	古墳時代後期		石室		土師器 須恵器 鉄鏃		

谷 2 号 墳

— 谷地区急傾斜地崩壊対策事業に係る発掘調査報告書 —

平成20年2月29日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所
